

物語と物語りのあいだ

——「どこにもたどりつかない道」の可能性をめぐる

飯 野 勝 己

はじめに

私が出版社勤めをしながら社会人博士課程という制度の恩恵を受け、ふらふらした足取りで再び哲学研究の道に片足を戻しかけたちようどそのころだったから、もう十三年ほど前のことになるだろう。千葉大学で野家先生が講演をするという話を聞いて、平日だったけれども打ち合わせなどと称して千葉まで出かけ、拝聴したことがある。集中講義の最終日の特別メニュー、といった催しで、講義のほうは当時新刊だった『クーン』『野家（一九九八）』の内容に沿ったものだったようだが、こちらは歴史の物語り論がテーマだった。内容は、当時すでに刊行されていた『物語の哲学』『野家（一九九六）』で詳述され、またその後さまざまな論考で展開されていく歴史と物語りの哲学と、ほぼびったり重なりあうものだったように思う。そのなかで強く印象づけられたのは、私たちにとっての「実在」とは目に見え手に触れる物理的存在ばかりではなく、素粒子や千葉大学のような理論的存在もあるという導入

物語と物語りのあいだ

部分で、これはもちろん、過去もまた物語り行為によって制作される理論的存在なのだという見方へと接続されていくのだが、何よりかみくだいた説明のわかりやすさに、ちょっと感銘を受けたのをよく憶えている^①。

印象的な記憶はもう一つあって、こちらは講演本編の終わったあとの質疑応答の場面である。講演には学生たちだけでなく、千葉大学の先生がたも何人か出席していたのだが、その一人から、細部はもちろん忘れたが、要は「過去が物語り行為によって制作されるものだ」としたら、歴史的責任の問題はどうなるのか」という趣旨の質問があった。野家先生の返答の詳細もまた記憶から飛んでいるが、「歴史の論理と倫理は分けて考えるべきだと思うんですね」という一言だけははっきり憶えている。なぜ印象深かったのか振り返ってみると、まずはもちろん、この返答に私がとても同意できたことがあるだろう。これは当時だけでなく、以下論じていくように、いまでも基本的にはそうである。しかしそれと並んで、先立つ質問の段で、「あ、やっぱり出たか」という思いがよぎったこともあると思う。これはたんなる想像だが、もしかしたら問われた野家先生本人にも、「またか」という思いがあったのではなからうか。もちろん、教壇での先生の話しぶりは、いつものように穏やかで紳士的で、うんざりしたような素振など、みじんもなかったが。

さて、いま書きつけた「やっぱり」や「またか」という科白が似つかわしいように、野家先生の反実在論的な歴史の哲学はいっけんあからさまに、歴史の倫理の問題と緊張関係をはらむ。過去そのものなどないという見方は、過去をありのままに見すえてこそ倫理的にも正しい歴史認識が得られるという常識的信念の足場を掘り崩してしまわないか。また、歴史は物語り行為によって制作されるという考えは、倫理的に相反するさまざまな歴史物語が並立するのを容認してしまわないか。たんに想定されるだけでなく実際にさまざまな批判があったことは、野家先生が『物語の哲学』の文庫版「野家（二〇〇五）」へのあとがきで回想している通りである。またここでは、右に記し

た二つの懸念にはば対応する二つの批判が具合的に取り上げられ、野家先生による応答も記されている。そこでもまた、「論理と倫理は別」というスタンスはぶれずに示されていて、私は再び同意するのだが、それと同時に、この緊張関係はどこまでも解消されないのではないか、という印象も残る。

では、その印象はどこに起因するのだろうか。本論ではまず、野家先生が応答していた二つの批判をあらためて取り上げて検討し、なぜこのような倫理的な平行線が生じてしまうかを考えてみる。そして、そこから反実在論的な物語り論に軸足をおいた倫理の可能性を推し量ってみたい。野家先生（次節より論文としての「本文モード」）に入るので、以降敬称は略させていただきます（の所説を受けとめたり、たんに擁護するだけでなく、できうればわずかも新しい展望を示すことを目標にしたいと思う）。

— ひそかに召還される「過去そのもの」 —

「過去はない」。いきなりこんなふうに断言されたら、多くの人は困惑するだろう。昨日の出来事は、歴史の本に書いてあることは、夢まぼろしだともいうのか、と。しかし、もう少ししていねいに言い直したらどうか。たとえば、「過去はない、少なくとも、歴史的言明を直接あてがってその真偽を判断できるような過去自体など、いま現在にはどこにも実在しない」。今度はおそらく、多くの人が同意するのではないか。なんといっても、「いまはない」からこそ、過去は過去なのだから。この点で、野家の反実在論的過去論は、「王様は裸だ」という発言に似ている。まず第一に、誰の目にもあからさまに明白なことをそのままに述べている、という率直さにおいて。そして第二に、明白なのだがいろいろな差し障りがあって人が口にしないことをあっさり言ってしまったという、

(俗な表現を使えば)「空氣の読まなさ」において。

では具体的にが差し障りで、どんな「空氣」があるのか。人はおそらく、さまざまな理由から、「過去はある」という実感を大切にするのだろう。懐かしい日々の回想にひたるとき、友人と思い出話で盛り上がるとき、思慮を欠いた行いを悔いるとき等々、日常のさまざまな場面で、私たちは「過去はある」と有無もなく思っている。いや、正確にいえばことさら思うのではなく、「過去はある」という実感を生^うきてしまっている。「過去はない」と口にすることは、日常のこうした罪のない思いやコミュニケーションに水をさす、ある種無粋な行いだとも、まずは言えるだろう。しかし、たんに無粋というだけではすまないことも、おそらく多々ある。そしてその典型というべき一つに、過去の行いの責任を問うといった倫理の場面がある。ということは、倫理の「空氣」が漂う領域付近では、「過去はない」という発話は、さまざまに過敏な反応を引き起こすおそれがある。

前節でわずかにふれた、野家の物語り論にたいする二つの批判のうちの前者、すなわち上村忠男によるそれ「上村(二〇〇二)」も、こうした反応の一例といえるだろう。とはいえ上村は、そこでナイーブに「過去の実在」を押し立てて、歴史にまつわる倫理のよりどころにしているわけではもちろんない。むしろ、「素朴實在論よりは構成主義のほうが、多くの歴史家にとって、いまではむしろ常識であるとみてまちがいないだろう」[ibid. p.78]と、まずは反實在論を当然視する構えをみせている。しかしそこから議論はすぐにトーンを変え、そうはいっても「物語り行為を離れて歴史的事実は存在しえない」という野家説は、ホロコーストのような「忘却の穴」、すなわちほとんど原理的に物語りえないように仕組まれた惨禍のことを考えれば鈍感と言わざるをえないし、むしろそうした忘却や隠蔽に悼^{なげ}さすものとすら思える、という趣旨の批判へと進む。批判としてはここが肝になるだろう。しかし、このタイプの批判を検討するのは次節にまわし、ここではむしろ、上村が駒を進める次の局面に注意を向けたい。

すなわち、野家の論にもこういう糸口があったのに、と矛盾を変えたその先である。

その糸口とは、アーサー・C・ダンターが『物語としての歴史』[Danto (1965)]で示した、有名な「理想的クロニクル」の概念である。「たとえ他人の心のなかであれ、起こったことすべてを、…『中略』…それが起こったときに、起こったように」[ibid.p.189/邦訳p.189、強調は原文]書きとめたそれを上村は、神川正彦[神川(一九七〇)]の所説も援用しながら、物語文による歴史記述のありようを照らし出す思考実験上の想定(ふつうに読めば、ダンターの論はそのようなものにみえる)から、歴史記述そのものを現にささえる「前構成的な可能性の領域」[上村(二〇〇二)p.88]へと読み替える。「起こることすべてを同時に、起こるときに、起こるがままに見てとることのできる、理想的な目撃証人」[ibid.]の証言録とされるそれは、もちろん現実にはありえないものだが、歴史記述において論理的に要請されるものとされる。³⁾いや、たんに論理的にだけでなく、倫理的にいつそう強く要請される、というべきだろう。なぜなら、そこには「いまでは「記憶されえぬもの」や「語りえぬもの」となってしまった「歴史の他者たち」の経験もふくめて、過去に起こった出来事のいっさいがそのままに記録されているはず」[ibid.p.91]だから。そこで上村の批判は、野家も大きく依拠しているダンターの論には、「忘却の穴」への構えをも引き出しているこのような契機がせつかく内在しているのに、それが「神の視点」から見下した歴史」[野家(一九九六)p.10]とあっさり片付けられているのはなんとも遺憾だ、と進むのである。

しかし、ここに何かひっかかりが感じられないだろうか。思考実験におけるあくまで仮の想定から、たとえ「要請」とはいえ現実の営みにおける、仮ではなく一定程度本気の想定へと読み替えることで、話にどこかねじれが生じてしまわないか。理想的クロニクルについて少し深入りしてみよう。歴史の記録はひとしなみに文章である必然性はない。「起こったことすべてを、起こったときに、起こったように」のためにはむしろ、映像や音声のほうが

いっそうありのままを記録できる。そこで、いわば「神のハードディスク」といえるような巨大な記録媒体を想定しよう。そこには、起こったことすべてがくまなく映像・音声データとして刻々と書き込まれていく。神のカメラなのだから、映像・音声だけでなく、人びとの心のなかの思考や感情、あるいは手触り・味・匂いなどの感覚質までもすべてそのままに記録してしまう。もちろん神自身は、（全能なのだから）好きなときに好きなようにこの理想的クロニクルを再生できる。全体を俯瞰するのでも、誰か特定の人物に内在するのでも、再生設定は思うがままであり、神はあらゆる視点からの過去をまったくそのままに追体験することができるのである。しかしこう考えてくると、そもそもこれは過去の記録の再生なのか、それとも過去そのものへのタイムトラベルなのか、区別がつかなくなるのではないだろうか。つまり、理想的クロニクルというのは、文字通りの理想の極限においては、過去そのものと同じになってしまうのである。もちろん神ならぬ私たち人間は、いずれにせよそこへのアクセスは禁じられているのだが。

つまり上村の批判は、いったんは歴史の反實在論を「ほぼ常識」と肯定しながら、「前構成的な可能性の領域」としての理想的クロニクルの要請という迂回路を通して、「過去そのもの」の實在を再び呼び込んでいるものであるように思える。もちろんこの「過去そのもの」は、それとつきあわせて歴史的言明の真偽判定がなされるような、素朴實在論的なものではもはやない。それはむしろ、「忘却の穴」に落とし込まれた「歴史の他者たち」の声がかろうじてそこから聞こえてくるような場として要請される。しかしともあれ、このようにして倫理は——正確には倫理のある種の位置づけは——「過去の実在」をひそかに召還し、「過去はない」との緊張関係を維持していくのである。

二 正しい唯一の物語

次に、第二の批判を取り上げよう。こちらは「過去はない」というネガティブな部分ではなく、その先にあるポジティブな部分、すなわち「過去や歴史は物語り行為によって制作される」というテーゼにかなする、高橋哲哉による批判である。

この明証性に依拠して、〈語りえぬものについては沈黙しなければならない〉とアプリオリに言えるとしたら、たしかに記憶の試練の大半は姿を消すことになるだろう。：「中略」：しかし、そのときひとはもしかして、結果的に「征服者」による「歴史の治世」に奉仕し、記憶の抹消という〈完全犯罪〉にわれしらず加担することになってはいないだろうか。〔高橋（一九九五）、p.5〕

まずは『記憶のエチカ』のなかで、名指しは控えられつつも、こうした批判的言及が行われる。冒頭の「この明証性」とは、「ログスおよびミュトスとしての歴史、物語としての歴史の明証性」〔ibid.〕のことであり、続く引用ふうの部分は、ウィトゲンシュタインになぞらえた「語りえないものについては、沈黙せねばならない」〔野家（一九九六、p.5）〕という野家のテーゼをほぼ明らかに指している。そして「記憶の試練」、これは上村も問題にしていた「忘却の穴」に投げ込まれた、あるいは投げ込まれそうになりながらもかろうじて穴のふちに引っかかっているような、「出来事の消失の出来事」〔高橋（一九九五、p.5）〕というべきことである。以上をふまれば、ここでの高橋の批判は大筋次のようになるだろう。過去そのものは実在せず、ただ物語ることによってのみ制作され

る、という見方は、実際に物語られてゐる歴史の明証性に依拠するとともに、そのことによって明証性をさらに強化する、というサイクルをかたちづくる。そしてこれはともすれば、「記憶の試練」にさらされ、物語りうることの領域からこぼれ落ちそうな出来事について、結果として——「われしらず」のうちに——沈黙を強い、それを抹消するようなはたらきをしてしまう。

右に引用したなかでとりわけ印象的なのは、〈完全犯罪〉という概念である。ミステリーなどに登場するさいは、いっさいの手がかりを残さない解決不可能な犯罪を指すことが多いが、「記憶の抹消」と等置されるこのくだりでは、そもそも行われたこと自体すら永久に感知不可能な、いっそう完璧な犯罪を指し示す。印象的というのは、こうとらえて歴史の文脈に置き直してみると、この概念はどこか不吉な想像をかき立ててはいないからである。ただでさえ惨禍にみちている歴史だが、その背後にはさらに多くの〈完全犯罪〉が隠されているのではないか。あるいは、特に気にせず住まっているこの地すら、忘れ去られた時のどこかで、〈完全犯罪〉によって私たちの手に落ちたものではないか。いまの自分の安穩とした暮らしは、もとをたどればそうした〈完全犯罪〉に、まるごとおぼさっているものではないか……³。

これらはもはや、「出来事の消失の出来事」とすらいえない、端的な「無」である。徹頭徹尾「語りえなさ」へとかき消されて、ほぼ妄想に近いニュアンスで想像をめぐらせるしかないようなものである。しかし、こうしたいわば不在の極限概念を立てることの意味は、このうえなく大きい。なぜなら、けっして語りえない領域にそれでも手を伸ばそうとする構えによって私たちは、そうでなければそこへ流し去られていたであろう、ほとんど語りえない、いかにような領域に属することや、そこからかすかに聞こえてくる声に、どうにか気づくことができるのだから。高橋がしばしば取り上げるホロコーストや日本軍従軍慰安婦の事例はまさに、そうしたか細い声を聞き取ることに

よって、かろうじて無のこちら側につなぎとめられたものにちがいない。

しかしそうなると、はたして高橋の言は物語り論への「批判」なのだろうか、と思えてくる。いや、もちろん批判的言及にはちがいないのだが、物語り論そのものを否定するような根本的批判かといえ、かならずしもそうはならないようにみえる。なぜなら、歴史は物語ることによって制作されるという基本思想は保持しつつ、高橋の指摘を真剣に受けとめることは可能だし、むしろぜひともそうすべきだと思われるからである。たしかに、物語り論には「記憶の抹消」に加担してしまうおそれがある。もし、明証性が無神経な割り切りのよさへと横滑りし、そのもとで「物語りえないものについては、沈黙せねばならない」と発話されるとしたら、このおそれはいっそう強まる。だから私たちは、「物語りえないさ」について繊細かつ慎重でなければならない。「記憶の試練」の領域からかすかに聞こえる声に耳をすませ、それを「物語りうること」へとどうにか移し入れること、少なくとも簡単に割り切つて「物語りえないこと」へと投げ込まないこと。高橋の言はこのように、物語り論への批判というよりむしろ補完として機能しうるように思えるのである。

しかし、数年後の『歴史／修正主義』[高橋(二〇〇一)]になると、批判ははっきり名指しに転じ、かつ容赦なく否定するトーンになる。概略を示すと、まずは——ただし実際は、当該箇所の後半に位置する——『記憶のエチカ』で示された論点を反復する部分がある。つまり、野家の物語り論は記憶の抹消に加担するおそれがある云々の繰り返しだが、ただし今回はたんに「知らずにそうするおそれがある」というだけでなく、言語行為として行為遂行的に、実際にそうしてしまっているのだ、という批判へと強められている。「『物語りえぬものについては沈黙せねばならない』という言語行為は、『語りえぬもの』の語り、そのつぶやきや、叫びや、ざわめきや、言葉にならないさまざまな声を、パフォーマティブに、禁止する『命法』とならざるをえないだろう」[ibid. p.78, プラケット内は引用者]。

いっぽう、それに先立ち新たな批判的論点が展開されている。物語り論はどんな物語でも気前よく認めるわけではなく、史料や証言などとの整合性、すなわち「合理的受容可能性」〔野家（一九九八b）、p.2〕で歴史的真理をはかるのだから、たしかに皇国史観のようなフィクションはしりぞけることができるだろう。しかし現在のナショナリズム的な歴史観は一定の事実をふまえるようになっており、また唯一の正史を自称するようなものではなくなっている。いわば、「これもまた、「国民の物語」という一つの歴史物語である」という開き直りとともに提示されるようになっていくわけで、そうなる物語り論にはこれを排除する論理をもちやないし、それどころかナショナリズム陣営に利用されることにすらなってしまう。こうして高橋は結論する、「歴史の物語り論」は、「国民の物語」を拒ける内在的根拠をもたない。「歴史の物語り論」は、「国民の物語」と両立可能であり、「国民の物語」の理論的拠り所となることさえできる」〔高橋（二〇〇一）、p.615〕。内在的根拠をもたない、すなわち理論自体からは出てこない。高橋は、『歴史／修正主義』のなかで「自体のなかに」「自体からは」といった言い回しを何度も繰り返し、ナショナリズム的な言説を構造的に排除しえない物語り論の欠陥を強調するのである。

これら直截な批判をどう受けとめるべきか。前者の反復的な部分については、とりあえず応答も同じことを反復し、やはり真摯な警告として受け取るのがいいと思う。意図せざるパフォーマンスな効果はそもそも言語行為一般につきまとうものだから、一般的指針の一つの適用例として、よからぬ効果が想定される場合、しかるべき配慮をなすのは当然のことである。いっぽう後者の新規批判にかんしては、これはなにも物語り論の支持者でなくとも、抵抗を感じる人が多いのではなからうか。ここで高橋が主張しているのは、歴史の理論は特定の歴史観を（結果としてではなく）内在的に、理論それ自体として排除しなくてはだめだ、ということである。その特定の歴史観はおそらく、高橋の思想信条としてあらかじめ倫理的・政治的に排除すべきとされているものである。しかしだとした

らこれは、これこれの理論は皇国史観を内在的にそれ自体として賛辞しないからだめだとか、資本主義を内在的にそれ自体として排除しないからだめだ、といったイデオロギー的な言説とどこが違うのか。このような言説が学問や社会にもたらしてきた数々の害悪を思えば、高橋のような主張は、たとえ対象が批判されてしかるべきものだとしても（私自身もそう思う）、それ自体としての原理的な排除というのはやはりおかしい、というよりむしろ怖い、と感じるのが普通なのではないだろうか。

この点にかんしては野家本人によって、「物語り論それ自体からは、「政治的」あるいは「倫理的」決定を正当化するいかなる基準も出てこない：「中略」：それどころか、私は「出てこない」ばかりでなく「出すべきではない」とすら考えている」〔野家（二〇〇五）、pp.365-6〕という応答がなされている。自らの倫理的正しさを信じて疑わない歴史観どうしのあいだで繰り広げられるイデオロギー闘争は、はた目にはどうにも不毛な印象を与えるが、歴史の物語り論はそうした不毛さへの解毒剤としての効能をたしかにもっているだろう。政治的・倫理的な選別は物語り論の役目ではないし、あるべきでもない。それは現に物語られたものを前にした私たちの役目である。こうして野家は言う、「歴史において「倫理」は最初に叫ばれるべき言葉ではなく、むしろ最後に語られるべき言葉である」〔野家（一九九八b）、p.72〕。

ところが高橋の批判を繰り返せば、そのような中立的なことを言っているから物語り論はだめなのだという。しかも、いっけん中立性を装うことにおいて、物語り論は実際には、言語行為としてパフォーマティヴに、一定のイデオロギーとして機能してしまっている、とも。とすると、少なくともこの批判の土俵のなかでは、ことはイデオロギー闘争の様相を呈しはじめ、どこまでも続く不毛な平行線がいやでも予想される次第となる。この平行線を現出させる対立点はけっきょく、多様な物語をとりあえず許容するか、はじめから政治的・倫理的な選別をかけるか、

という一点にあることになるだろう。「過去そのものは実在せず、制作される」というテーゼは、もとより両者に共通しうる。違うのは制作することの正当性をめぐる基準の広狭であり、それを広くとって複数の物語りを許容する前者に対し、後者は倫理的な正しさのフィルターを厳しく配備する。そしてその結果、「正しい唯一の物語」への志向が、たとえそう言わずともあらわになっていくのである。

三 物語と物語り

「私自身は歴史を『忘却の海』に点々と散在する記憶の島々といったイメージで考えています」「中村・野家（二〇〇〇、p.45）。上村や高橋が強調する、「歴史の肉体に穿たれた忘却の穴」に對置して野家は、こんなイメージを提示している。「忘却の穴」というと、歴史における忘却をあたかも法外で例外的な事態であるかのように思わせてしまうが、それは違う。生起する出来事のひとつはトリヴィアルで無害なものであり、そうしたありようにふさわしく実際に忘れ去られ、見えざる「忘却の海」をなしていく。このイメージを野家は、「不十分な代案」[bad]と遠慮気味に差し出しているが、私にはむしろ、物語り論の魅力の一面を正確に言い当てたものであるように思える。

その一面とは、誤解をおそれずにいえば、いい意味での「軽み」を私たちの生にもたらしてくれることである。過去にびっしり敷き詰められていて、ときに私たちの肩に重くのしかかってくる歴史、というヴィジョンから解放してくれることである。「忘却の海」にたゆたうほんのわずかな出来事が、実際に物語られるという僥倖に恵まれ、島のようにぼつぼつと顔を出す。しかも、それらはつねに物語り直しへと開かれているから、島というよりむしろ、

砂州のようにはなく流動的なものである。一つの出来事についての物語が複数成り立つこともあるから、心もとなきはおさら増す。こうして歴史は、「びっしり」どころか隙間だらけの、いわば「希薄性」と「浮遊性」をまとったものになる。あえてだけいてしまえば、「スカスカでフワフワ」というイメージである。これは、たとえば「正しい歴史認識」といった「重み」にともすれば圧迫されがちな私たちにとって、貴重な「軽み」を与えてくれるものではないだろうか。

しかもこのことは、私の考えでは、一人ひとりの個人史へ差し戻すこともできる。差し戻すというのは、もともと歴史の物語り論は大森莊蔵の過去論、すなわち想起による体験的過去の制作というモチーフ「大森（一九八五）など」の、歴史的過去への拡大適用という面があったからで「野家（一九九八b）、ロロ」、つまりそうした拡張の先で得られた「忘却の海」というイメージは、個人史にもまったく同様にあてはまるように思えるのである。

歴史的過去と違ってなにしろ自分自身のことだから、過去の多くがいまの自分にありありと想起されるかといえ、事実はいまのこととなる。日常の大半を占めるどうとしないことのない出来事のほとんどは、すぐさま忘却の海へと流れ去っていく。いまの私を充たしているさまざまな知覚印象や思いもまたあつという間に流れ去り、なかったも同然のことへと移行する。もちろん誰もがたくさんの思い出をもつが、それらは歴史上のエピソードと同じく、島や砂州のようなものである。もしも誕生から現在にわたる時間を貫いて横たわる四次元的実体を「私」とみなし、その中身を私が経てきたすべての体験が満たしていると考えたら、いまを生きる私にとってのその「私」とは、歴史的過去と同様「スカスカでフワフワ」なものであるほかない。希薄で浮遊する「私」、というこのイメージは、場合によっては不安をかきたてるものかもしれないが、自分というものの荷重がときに耐えがたくなることがあるとしたら、それにたいする治癒的効果にもつながりうる、肯定的な軽みを提供してくれるものにもなるだろう。

しかし、上村や高橋のように、こうした「軽み」に批判的な人々がいる。本論で検討したことからすれば、上村はどちらかといえば希薄性に、高橋ははっきりと浮遊性に異議を唱えている。彼らの批判はひじょうに真摯な、倫理的使命感にあふれたものだし、前節の前半でみたように、物語り論の側が耳を傾けるべき内容も少なくない。そして何より、重い。とりあげられる題材の重大さという点でも、それにたいする真摯さという点でも、相当な重みをもつ。しかし、倫理というものは、このような「重み」一辺倒のものなのだろうか。「軽み」と親和性をもつ、あるいは「軽み」を経てこそはじめて見出されるような倫理は、ないものだろうか。

そのヒントもまたおそらく、物語り論のなかに含まれている。いや、含まれているどころか、物語り論は全体としてはじめからそれを、明示的に語ることはなくても、ずっと示しているように思われる。それは簡略に言えば、正しいものとして実体化され固定された内容としての倫理に對置される、開かれたプロセスとしての倫理といったものであり、物語りの行為性や相互性、流動性といったありようの、いわば倫理的相貌として示されるものである。ただこれだけではさすがに大づかみすぎるので、以下、「物語」と「物語り」の対比を足がかりにして、もう少し具体的に検討したいと思う。

野家の説明によれば、「物語」は英語の *story* にあたるもので、完結した構造体を指す名詞的概念であり、「実体」や「フィクション」といった意味あいをしるべきもつ。それにたいして「物語り」は *narrative* に相当し、動詞的概念として遂行的・機能的な意味あいをもなっている[野家(一九九八b)、p.29; 中村・野家(二〇〇〇)、p.175]。この比較的シンプルな対比をもう少し展開するなら、まず「物語」については、「非冗長性」といふべき特徴がみられると思う。たとえば劇映画のある場面に、いっけん無関係な何か栓のようなもののショットが挿入されるとしよう。しかし見かけ上の無関係さに反し、この種のは通常、いずれこの栓が破裂して物語が急展開するといっ

たことの伏線となる。このような思わせぶりのショットがもしも本当に無関係のまま放置されたら、観客は不可解に感じ、物語としての瑕疵や、たんなる編集ミスとみなすだろう。つまり物語においては基本的に、細部のすみずみまで全体の構造体に寄与する意味に満たされ、そこから外れた、冗長な「遊び」の居場所はないのである。また、物語にはしばしば「制度的固定性」がともなう。これは印刷技術が普及した近代以降にとりわけ顕著だが、ある物語が印刷・刊行された場合、そのテキストは「決定稿」として固定化し、容易なことでは動かしがなくなる。これは広い意味での文化的制度としてもそうだし、著作権の一環をなす「同一性保持権^⑧」といった法制度として具体化されてもいる。こうみていくと、「完結した構造体」や「実体」といった物語のありようが、時代の移りゆきとともに、文化や制度によっていっそう固定的なものへと昇華されてきたことがよくわかる。

いっぽう「物語り」はどうか。右のような特徴をもつ物語との関係という点から、物語りには両義的な性格があることがみてとれる。まず物語りは、それを積み重ね、他者との共有を広げることによって、完結した構造体としての物語を確立することに寄与する。しかしそのいっぽうで、物語りは物語への抵抗原理としても働くだろう。どこまでも物語り続け、あるいは機会をとらえて物語り直すことをつうじて、物語の実体性や固定性、完結性をゆさぶり、流動的なありようへと差し戻し続けるのである。これはことさら抵抗しようという意思の有無にかかわらず、現にさまざまな場面で起こっていることである。史料の新発見や新説の受容、政治的配慮などによる物語り直しによって、歴史教科書の内容は変化してきたし、これからも変化し続けるだろう。いっけん固定性がひじょうに強い文学作品のような領域でも、物語り直しは行われる。オリジナル原稿の発見や新たな校訂によるテキストの変容はよくみられることだし、ときに作者自身によって本格的な物語り直しがなされることもある。こうした面をみると、実体としての物語の実在についても、疑いが沸きおこってくる。つまり、固定した実体としての物語など実

在せず、どこまでも続く物語りの流れのある箇所に、文化や制度によって切れ目が入られ、その断面があたかも固定した実体であるかのように見えているだけではないか、と。

しかし、物語を実体化させるのは文化や制度だけだろうか。そうではない、と思う。それらはむしろ付加的なものであり、より根本で物語をささえているのは、やはり「正しさ」というものではないだろうか。すなわち、なんらかの「正しさ」に至りついた地点で流動性は凍結され、物語りは物語としての結晶化へ向かうのではないか。フィクションであれば美的な完成度や、作者の意図の十全な反映といったものが、物語を固定させる「正しさ」になるだろう。いっぽう歴史物語を固定させる「正しさ」として、事実との一致や整合性とならんで重要なものが、上村や高橋の物語り論批判にみられるような、倫理的な正しさである。上村のように過去それ自体をひそかに召還しようと、高橋のように実在論から一定の距離をとろうと、倫理的に正しい物語を志向する点で、両者は変わらない。そして、正しい物語が確定されるとともに、物語内容としての倫理が立ち現われる次第となる。

それについて物語り論は、物語りプロセスの倫理を対置する。物語りの流動的なありようは、唯一の確定した物語へと結晶することはなく、したがって物語内容としての倫理に確定的にコミットすることもない。このように声高な正義に至りつかない物語りの倫理はしたがって、もっぱら物語り行為のプロセスのありようとして示されるものとなる。たとえば、物語り直しへと自らを開いていく姿勢、異なる声との対話を重視するインタラクティブな構え、自らが物語ったものを最終解として他者に押しつけない態度、といったものが、その具体的な姿になっていくだろう。

物語り論にコミットし、その姿勢を一貫させるなら、このようなコミュニケーションエイティヴな倫理を選び取るほかないように思われる。具体性と厳格さを持った物語内容としての倫理と比べると、これはいかにもひ弱で常識的な、よ

くある多元主義にみえるかもしれない。高橋の批判にあったように、倫理的に危険な物語りを許容してしまう可能性も、どこまでも残る。しかしいっぽうで、先にみたように物語内容としての倫理は、それ自体が危険な物語へと変容しかねない怖さをはらんでいる。このことと引き比べると、物語り論がもつ、いわば「どこにもたどりつかない道」の倫理性は、「軽み」のある種の強みに転ずるものとして、相応の可能性をもつように思えるのである。

四 論じ残したことなど

実は、本論の構想段階での目論見は、物語り論を歴史の領域からメディアの領域に移植する道筋を示すことにあった。というのも以下に述べるような次第で、私にはメディアにおける報道というものが、歴史とほぼ同型をなす、物語り行為だと思えるからである。

まず、そもそも人はなぜ歴史を物語るのか、という巨大な問いに一言で答えの方向性だけ示すとしたら、自分が立つ場所に安定した位置づけを与えるため、とひとまずいえるだろう。人は死後の闇にときに恐怖を覚えるが、考えてみれば生前の闇、未生のあいだにすでに過ぎ去った無限に近い時間の闇は、実在感をともなうぶん余計に不気味ともいえる。だから人は、歴史を語り、歴史を学ぶ。自分のかぎられた生を「無限の空間の永遠の沈黙」「パスカル「パンセ」、断章二〇六」での宙吊りのままにせず、人類や、国家や、共同体の大きな流れのなかに位置づけ、よるべきさをいくぶんか埋め合わせるのである。ところで、パスカルの名言に時間と空間の両様が含まれているように、こうした構図は通時的な軸だけでなく、共時的な軸においてもみられるだろう。後者におけるよるべきさを現代において埋め合わせているのが何かといえば、メディア報道である。こうして、「人はなぜ報道を求めるのか」

という問いへの答えの方向もみいだされる。すなわち、かぎられた直知世界の外側の「闇」を埋め合わせ、自分が立つ場所に安定した位置づけを与えるため、と。

このような共通の構図がいったん見出されれば、あとは比較的容易だろう。メディア報道もまた、無数の事象がなす海のなかからほんのわずかなものをすくい上げて島や砂州となすいとなみであり、したがって希薄性と流動性がみられること。「事実そのもの」を想定する「客観報道」という空虚な理念がどこまでも延命するいっぽうで、「権力監視」や「弱者に寄り添う」といった倫理的な理念によって報道の「正しさ」が裏書きされる場合も少ないこと。このようにさまざまな面でメディア報道は、歴史との相似形を描いていく。メディア報道もまた、まぎれもなく物語りなのである。

とするとそこにもまた、物語と物語りの対立軸が見出されるだろう。私のもともとの目論見はけっきょく、歴史におけるこの対立軸をメディア報道にスライドさせ、そこにみられる物語志向のありようを批判的にあぶりだすことにあったのだ。取り換えのきかない個々の出来事が、メディアの手にかかるといとも定型的な物語におさめられ、行儀よい納得の水準に整頓されてしまう。これはたとえば、先の震災報道においても、広範にみられたことである。震災や原発事故の緊迫がひとまず遠ざかると、喪失と再生を基本プロットとする物語的な報道が大挙して現れた。もちろんそれらは、「内容としての倫理」への志向を共通にもつ、真摯で誠実なものである。しかし、本論でみたように、そこには同時に怖さや危うさもある。場合によっては、物語への枠づけがかえって出来事の個性を扼殺する暴力として感受されることすら考えられる。物語装置としてのメディア、その潜在的な暴力性、それへの抵抗原理としての物語り行為。しかし紙幅が尽きたいまはひとまず、このように風呂敷を広げたところで満足し、詳細は他日を期すしかない。

註

- (1) この導入的説明は例を東北大学に入れ替えて、「過去の実在・再考」の一部としておそらくほぼ同時期に活字化されている『野家（一九九九）、pp.37-38】。
- (2) この観点は野家自身の論考でも重視されていて、かつ、時間を追ってその傾向が増すようにみえる。近年になると、「物語りは行為の意味を理解し、その責任を判断するための不可欠の概念装置なのである」『野家（二〇〇七）、p.29】というように、物語り論と責任概念を強く関連づける言明も見出すことができる。
- (3) 上村は神川による次のコメントを引いて、この論点を補強している。「ダントーは、『アイデアル・クロニクル』の不可能性を示さんとするが、これはむしろ当然なことであって、問題は不可能か否かではなくて、その設定の意義にある」『神川（一九七〇）、p.116】。
- (4) 次のように高橋も、この観点に言及している。「忘却の穴」は、アウシュヴィッツやコリマやその他の場所にありえたばかりではなく、いたるところにありえたのであり、現にあったにもかかわらず、まさに「完全な忘却」であったがために、われわれの記憶の及ばぬところとなってしまったのかもしれないのだ」『高橋（一九九五）、p.18】、強調は原文】。
- (5) これは結果としてそういう効能をもつというだけでなく、物語り論のそもそもの狙いの一つとして、実際に野家の念頭にもあるものではないかと思う。「最近の歴史をめぐるさまざまな論争においても：『中略』：『倫理の過剰』とも見える発言が目立っていることに、僕自身はいささか危惧の念をもっています。：『中略』：『倫理』が『論理』を押しつけてしまえば、歴史学は経験科学であることを否定され、イデオロギーの争いとなって批判的議論は成立しなくなりす」『野家（一九九八b）、p.72】。
- (6) 別のところで野家は、「忘却の海に浮かんだ記憶のブイ」『野家（一九九九）、p.34】という比喩も提示している。まさにフワフワ浮遊するようなイメージである。
- (7) いうまでもなく、これは本論でも先に問題にした「過去それ自体」の個人版とみなすことができるだろう。
- (8) 日本の著作権法の場合、第二十条の一に該当する規定がある。

文献

- 上村忠男 (二〇〇二) 『歴史的理性の批判のために』、岩波書店。
- 大森莊蔵 (一九八五) 『過去の制作』、飯田・丹治・野家・野矢編『大森莊蔵セレクション』、平凡社、二〇一一年、pp.362-90。
- 神川正彦 (一九七〇) 『歴史における言葉と論理——歴史哲学基礎論』、勁草書房。
- 高橋哲哉 (一九九五) 『記憶のエチカ』、岩波書店。
- 高橋哲哉 (二〇〇一) 『歴史／修正主義』、岩波書店。
- 中村雄二郎・野家啓一 (二〇〇〇) 『歴史——二十一世紀へのキーワード——インターネット哲学アゴラ』、岩波書店。
- 野家啓一 (一九九六) 『物語の哲学——柳田國男と歴史の発見』、岩波書店。
- 野家啓一 (一九九八a) 『クーン——パラダイム——現代思想の冒険者たち』第24巻)、講談社。
- 野家啓一 (一九九八b) 『歴史のナラトロジー』、岩波新・哲学講義8『歴史と終末論』、岩波書店、一九九八年、pp.1-16。
- 野家啓一 (一九九九) 『過去の實在・再考』、岩波新・哲学講義別巻『哲学に何ができるか』、岩波書店、一九九九年、pp.27-55。
- 野家啓一 (二〇〇五) 『物語の哲学』、岩波現代文庫。
- 野家啓一 (二〇〇七) 『ホモ・ナランスの可能性』、野家啓一編『ヒトと人のあいだ』(「シリーズ ヒトの科学」6)、岩波書店、二〇〇七年、pp.1-33。
- バスカル、B. (一九六六) 『ペンセ』前田陽一・由木康訳、『世界の名著24 バスカル』所収、中央公論社。
- Danto, A. C. (1965), *Analytical Philosophy of History*, Cambridge University Press. (邦訳『物語としての歴史』河本英夫訳、国文社、一九八九年)

(いいのかつみ・静岡県立大学国際関係学部准教授)